

紹介

國家文物局主編

『中國文物地圖集』

(An Atlas of Chinese Cultural Relics)

愛宕 元

國務院文化部管下の國家文物局が主導して、直轄市・省・民族自治區の文化廳や文物局が考古學や歴史學の専門家を動員して個々の行政區内の歴史遺跡を、古代から近現代にまでわたってきわめて詳細に採録した『中國文物地圖集』の刊行は、中國の歴史研究者にとって現地の實地踏査を行う上で非常に役立つ待望の工具書と言うことが出来るよう。とくに石刻に關しては、歴代の著名な石刻のみならず、地方志に著録されているようなあまり知られていない石刻の具體的な所在や現状を知ることとも可能となり、利用價値の高いものとなっている。

「前言」に據ると、一九八〇年代に全國的に大規模な文物調査がなされ、從來知られていなかった歴史遺跡や遺物が數多く確認

された。國家文物局ではこの調査で得られた成果を『中國文物地圖集』シリーズとして刊行することに決定した。その全體構想は各省・民族自治區・直轄市をそれぞれ分冊として計三一冊、及び全國重要文物分冊を一別冊として刊行しようというスケールのかい出版計畫となっている。したがって三二分冊の内譯は、(1) 河北省、(2) 山西省、(3) 遼寧省、(4) 吉林省、(5) 黑龍江省、(6) 江蘇省、(7) 浙江省、(8) 安徽省、(9) 福建省、(10) 江西省、(11) 山東省、(12) 河南省、(13) 湖北省、(14) 湖南省、(15) 廣東省、(16) 海南省、(17) 四川省、(18) 貴州省、(19) 雲南省、(20) 陝西省、(21) 甘肅省、(22) 青海省、(23) 內蒙古自治區、(24) 廣西壯族自治區、(25) 西藏自治區、(26) 寧夏回族自治区、(27) 新疆維吾爾自治區、(28) 北京市、(29) 天津市、(30) 上海市、(31) 重慶市ということになる。それらの内、現時點(二〇〇三年八月時點)では下記の八種が刊行されている。

(1) 國家文物局主編・廣東省文化廳編

『中國文物地圖集 廣東分冊』

廣東省地圖出版社、一九八九年九月、

地圖・圖版・寫真二一四頁、文物單位簡介二七六頁、索引なし、六〇元。

(2) 國家文物局主編・河南省文物局編制

『中國文物地圖集 河南分冊』

中國地圖出版社、一九九一年二月、

地圖・圖版・寫真三〇〇頁、文物單位簡介五七六頁、索引六六頁、一六〇元。

(3) 國家文物局主編・吉林省文化廳編制

『中國文物地圖集 吉林分冊』

中國地圖出版社、一九九三年一〇月、

地圖・圖版・寫真一五六頁、文物單位簡介二一八頁、索引三四頁、九八元。

(4) 國家文物局主編・青海省文化廳編制

『中國文物地圖集 青海分冊』

中國地圖出版社、一九九六年一月、地圖・圖版・寫真一二五頁、文物單位簡介一八六頁、索引二九頁、一一〇元。

(5) 國家文物局主編・湖南省文物局編制

『中國文物地圖集 湖南分冊』

湖南地圖出版社、一九九七年九月、地圖・圖版・寫真二三〇頁、文物單位簡介四五六頁、索引六九頁、附錄一四頁、二四八元。

(6) 國家文物局主編・陝西省文物事業管理局編制

『中國文物地圖集 陝西分冊』

陝西地圖出版社、一九九九年九月、

冊』全三冊

中國地圖出版社、一九九八年二月、
地圖・圖版・寫真五〇九頁、文物單位
簡介一二三頁、索引二四八頁、七一
〇元。

(7) 國家文物局主編・雲南省文化廳編著
『中國文物地圖集 雲南分冊』

雲南科技出版社、二〇〇一年三月、地
圖・圖版・寫真二一〇頁、文物單位簡
介二九五頁、索引三五頁、附錄一四頁、
二二五元。

(8) 國家文物局主編『中國文物地圖集
天津分冊』

中國大百科全書出版社、二〇〇二年一
月、地圖・圖版・寫真一五三頁、文物
單位簡介一六〇頁、索引一四頁、二〇
〇元。

まず本地圖集の内容を概観するために、
全冊に共通する一〇項目の「凡例」の大意
を紹介しておく。

1. この地圖集シリーズは、各省・自治
區・直轄市の分冊と全國重要文物の
分冊から構成される。前者は文物の
調査とその現状についての概説、序
圖、文物地圖（專題文物圖、市・縣

文物圖）、重要文物圖、文物單位の
簡単な紹介、文物單位の索引からな
る。

2. 原則として、數度の文物調査を経て
確認された遺跡や遺物を収録し、一
部に保護のために移築された古建築
と移置された碑刻を含む。

3. 収録した文物は一九四九年までとし、
四九年以後のものは各級の文物保護
單位に指定されたものととする。

4. 調査されたり發掘された古遺址と墓
葬、すでに壊れた古建築で元の場所
には何も残らないが、依據すべき記
録資料があるものは、いずれもその
所在地に「簡介」として記した。

5. 収録した移動することのない文物は
七種の大分類と二七種の小分類に區
分し、地圖上にそれと判別出来る符
號で表示した（七大分類及び二七小
分類は、1古遺址、1. 洞穴と聚落
址、2. 古城址、3. 長城遺址、4.

烽燧・烽火臺遺址、5. 古道遺址、
6. 古運河・渠道遺址、7. 古窯址、
8. その他の古遺址、2古墓葬、
3古建築、9. 木造建築、10. 古

塔・經幢、11. 古橋、12. 古城、13.
關隘、14. 古道、15. 古運河・渠道、
16. 園林、17. その他の古建築、

4石窟寺及び石刻、18. 石窟寺、19.
碑刻、20. 岩畫、21. その他の石
刻、5近現代の重要史跡、22. 革
命史跡、23. その他の重要史跡、

6近現代の代表的建築、24. 中國各
民族の特色をもつ建築、25. 外國風
の建築、7その他の文物、である。
この内、2古墓葬と7その他の文物
は小分類がなされていないので、實
際の小分類は二五種となる。

6. 同時代または異なる時代で關連しな
がら分類を異にする文物で同一場所
に存在するものは、主たる文物の分
類に入れ、「文物單位簡介」におい
て説明を加えた。

7. 一カ所の文物單位の分布範圍が廣域
にわたり、そこに含まれる文物の數
量が多かつかなり重要な場合には、
主たる文物の分類の下で注記した。
文物單位に附された番號は縣級行政
區を分類單位として順番を付け、總
番號と分類番號とに區別した。各分

類では時代順に番號を附した。縣域が跨がるような比較的大規模な文物は、それぞれの縣の文物地圖中に記し、「文物單位簡介」において説明を加えた。

9. 文物單位の名稱は原則として正式名稱（學名）とし、一部では一般的な通稱を用いた。命名しようなない文物は所在地の村落名や地理的名稱を用いた。

10. 年代は中國歷史學界で公認されている紀年を採用した。古人類や古脊椎動物の化石の出土地は地質學の年代を用いた。有史以後は王朝名を使用した。一部の邊境地域の文物でいずれの王朝時代に屬するか決め難いもので、おおよそ青銅器時代と認められるものは青銅時代とした。一九一二年以後の近現代の文物は、西曆紀年を用いた。

この「凡例」によって各分冊の概要は知り得ると思うが、既刊の『陝西分冊』を例にとつてより具體的な内容を紹介することにした。上下二冊の上冊は序圖として全國の政區圖、陝西省の政區圖・地勢圖・交

通圖を掲げる。次に殷周時代から清代までの一二種の歷史地圖（四三〇萬分の一）がある。そして專題文物圖として「文物單位分布圖」、「全國及び省重點文物保護單位圖」、「歷史文化名城圖」、「既發掘重要遺址・墓葬圖」、「舊石器・新石器時代から近代に至る歷代の遺址圖」、「古城址圖」（以上二五〇萬分の一）、「長城遺存圖」（一七〇萬分の一）、「古代帝王陵墓圖」（七四萬分の一）、「古道路・橋梁遺存圖」、「古代水利遺存圖」、「古塔圖」、「石窟寺・造像碑及び經幢圖」、「重要碑刻及び摩崖題刻圖」、「革命根據地史迹圖」（以上二五〇萬分の一）を掲げ、それぞれにかなり詳しい概説が附されている。これらに續けて陝西省管下の西安市を含む一三市と八三縣の文物圖（一〇萬分の一―五五萬分の一）があり、遺跡の現地踏査をいかに密度の濃いものに出來るかはこの市・縣文物圖の利用如何にかかっていると言えよう。その意味で市・縣文物圖の利用價值はきわめて高いものがある。下冊の「文物單位簡介」では文物圖に示された全ての遺跡や遺物の時代、現狀、そして所在地を各縣別に編番號を附して鄉鎮下の村落名まで明記して概説し、文物圖と文

物簡介を併せ参照することで、より緻密なフィールド調査が可能となる。宋の張禮が著した唐の古都長安南郊の史跡探訪記『遊城南記』、元の納新が河北から河南にかけて史跡を巡り歩いた記録『河朔訪古記』の現狀を筆者が現地調査した際に、既刊の『河南分冊』と『陝西分冊』はきわめてマインナーな歷史遺址をも記してくれているために、大いに役立った。また下冊では、新たに確認された重要な遺跡や遺物については『文物』、『考古』、『考古與文物』、『文博』などの調査報告や發掘簡報の掲載卷數を注記してあり、より詳しく知るための便宜も圖られている。

既刊八冊を通觀して、本地圖集を利用する際に注意すべきいくつかの點を指摘しておこう。より古い時代の時代比定にやや問題があること、とくに最古の王朝とされる夏王朝の歷史的實在が既定の事實とされて夏の遺址と稱するものが明記されているが、これはそのまま信用してはならない。その他にも時代考證にまますら不正確なものや誤りがあるので、注意を要する。次に本地圖集をより有効に利用するための留意點を記しておこう。廣範圍に點在する歷史遺跡を限

られた時間内に出来るだけ効率よく踏査するには、移動時間を節約するために高速道路を有効に利用するのがよい。地域による差はあるものの、今や中国の高速道路は年間二〇〇〇―三〇〇〇kmという驚異的な建設速度で伸びており、各分冊は刊行時時点で開通している高速道路しか記していない。

本圖を用いてフィールド調査を効率よく行うためには、高速道路延伸の最新情報を入力しておくことが欠かせない。

既刊八冊では、例えば『天津分冊』が三二七頁の分量であるのに對して『陝西分冊』は一八八〇頁とおよそ六倍近くもあり、各冊には内容的な密度の濃淡がかなりある。それぞれの地域の歴史的背景とそれに伴う遺址の分布の多寡による當然の結果ではあるが、各分冊の利用度には大きな格差があることを知っておく必要がある。また近刊になるほど価格が高くなっており、今後の續刊の価格が大いに気懸かりである。『陝西分冊』は全三冊の巨冊ではあるが、七二〇元というのは日本で購入することを考えると、あまりにも高額に過ぎるというのが筆者の率直な思いである。

Gordon Whitteridge

Charles Masson of Afghanistan

稲 葉 穰

本書は、アフガニスタンおよび北西インド地域の古代史に興味を持つ者であれば一度は名前を聞いたことがあるであろう探検家、考古學者（好古家という方が相應しいかもしれないが）チャールズ・マッソンの評傳である。實は本書の最初の出版は一九八六年のことであつたが、それほど部數が出回っていなかったのか、筆者は初版時には入手することが出来ずにいた。今回の再刊は、幾分かは近年アフガニスタンに世界の注目が集まっていることのおかげなのだろう。一九世紀における最初のグレート・ゲームの渦中にいたマッソンの生涯が、二〇世紀のグレート・ゲームの悲惨な結果を我々が目にしつつある今、あらためて紹介されることを、時宜を得たと形容すべきなのか、あるいは皮肉なことと見るべきなのか。

著者であるGordon Whitteridge卿は長くイギリスの外交官をつとめた人物であり、一九六五年から六八年の三年間、アフガニスタン大使としてカーブルに駐在したのを最後に引退した。その後はThe Anglo-Thai SocietyのChairをつとめ、またSociety for Afghan Studies (後のSociety for South Asian Studies)のメンバーでもあつたが、残念ながら一九九五年に亡くなっている。

本文は一八八頁からなり、それが一八の章に分けられているから、平均すると一章あたり大體一〇頁強といったところ。この構成からわかる通り、どちらかというと一般向けに書かれた、日本でいえば「新書」のような性格のものであろう。有り難いことに英語も随分と平明で讀みやすい。卷末には簡略な注釋と參考文獻表、索引が附されている。

本書の敘述はマッソンの生涯をおつて時代順に進められ、當時の時代背景や考古學的知識の有り様に關する説明が適宜その中に挿入されている。以下、マッソンの生涯の劃期にしたがつて、便宜的に四つの時期に分けて内容を紹介する。